

■小泉三申(策太郎)

こいずみさんしん

学問のすすめ1872=

明治6年政変 1873= 1歳

琉球処分・・・1879= 7歳

明治14年政変1881= 9歳

秩父事件・・・1884=12歳

帝国大学始・・・1886=14歳

国民之友始・・・1887=15歳

初の対等条約1888=16歳

帝国憲法発布1889=17歳

帝国議会議始・・・1890=18歳

足尾鉞毒始・・・1891=19歳

大本教・・・1892=20歳

郡司千島探検1893=21歳

日清戦争始・・・1894=22歳

日清戦争終・・・1895=23歳

白馬会・・・1896=24歳

八幡製鉄始・・・1897=25歳

子規句歌革新1898=26歳

Bushidou・・・1899=27歳

日比谷公園・・・1903=31歳

日露戦争始・・・1904=32歳

日露戦争終・・・1905=33歳

アヲキ創刊・・・1908=36歳

伊藤博文暗殺1909=37歳

大逆事件判決1911=39歳

明治天皇没・・・1912=40歳

ロシア革命・・・1917=45歳

ベルサイユ条約・・・1919=47歳

大暴落・・・1920=48歳

原敬首相暗殺1921=49歳

水平社結成・・・1922=50歳

関東大震災・・・1923=51歳

護憲三派圧勝1924=52歳

治安維持法・・・1925=53歳

日本時代始・・・1926=54歳

金融恐慌・・・1927=55歳

共産党事件・・・1928=56歳

世界恐慌・・・1929=57歳

海軍軍縮条約1930=58歳

満州事変・・・1931=59歳

五一五事件・・・1932=60歳

国際連盟脱退1933=61歳

帝人疑獄事件1934=62歳

芥川直木賞始1935=63歳

日中戦争始・・・1937=65歳

記者遍歴後、株式投機で巨利あげて国会に進出し「政界の策士」の一方、幸徳秋水らを支えた「背反の人生」。

静岡県賀茂郡三浜村子浦で、漁師小泉定次郎・みねの長男に生まれる。

この年、旧幕臣の梅野虎次郎が、小学校になった{成功館}の初代訓導に就任。平安時代に流刑地になった南伊豆には、上方の地名と文化が多く残るが、子浦は、それより古い地名。4人の弟・4人の妹が誕生して、9人兄弟になる。

梅野虎次郎が去る年前後に、{成功館}に入学するが、それ以前から入学後も、梅野の私塾に通い続けたらしく、強く影響を受け、漢籍の知識は並大抵でないものになっていく。少年時代は旺盛な読書欲を示し、

この頃には、近所の豪家から「三国志」を借りて読破したという。申の年・申の日・申の刻に生まれだったことで、梅野から、「三申」の番号を撰て貰っていた。青雲の志抑えがたく、

子浦の禪寺の住持になり小学校教員を兼ねた前島元策と出会ってまもなく、{成功館}を卒業して上京、前島も転任するが、文通での、師弟関係になる。自ら祖父・父以上と慕う伯父斎藤辰治が(数え)54歳で死去、衝撃を受け、自らもその年齢を一期と定める。銀座の鉄物商の丁稚奉公となり住み込むが、店になじまず、前年に徳富蘇峰が出版した「将来之日本」に惹かれ、辞めて帰郷し、母校{成功館}の臨時教員になるが、蘇峰が発刊する{国民之友}を耽読して私淑して文章への志向し、来村した太平記読みの青年僧侶辻村二休に惹かれ、彼の住む横浜に赴き、席亭で、伊藤痴遊の政談演説を聞いて、政治にも興奮。

再び帰郷し、学制改革で変わった三浜尋常小学校の臨時教員となり、**「新聞界に志を抱くようになって、隣村の女性斎藤やす(安子)と恋愛するうち、生来身体が弱かったことから徴兵を逃れ、自由党系の{静岡日報}に入り、記者生活が始まるも、火災で休刊となったため、再び上京し、自由党の先輩を訪ねるも面倒みてもらえず、窮して、人気作家村上浪六を訪ね、食客となるも、あわずに飛び出して放浪、**

春陽堂「新小説」の懸賞で「雪解水」が一等銅印で、デビュー作になるも、生活の道は開けず、上京して**「板垣退助が社長の{自由新聞}の記者となる。給料は安く、「慶安騒動私見」を連載、日清戦争が勃発して書いた連載記事では、疑念を示して中止命令、{二六新報}の記者仲間からたのまれて、剣士の略伝を寄稿したりして凌ぐ一方、高知から来た幸徳秋水と気が合い、社屋に同居して親交するが、**

**「{自由新聞}が潰れてしまい、友人の縁で、秋さま新聞」に移り、日清戦争特派記者となって、大本営のあった広島で、日本が勝利して講和条約を結ぶまで取材、**

**友人記者長田偶得から持ち掛けられて、{装華房}の{偉人叢書シリーズ}第一作として刊行した「(慶安騒動改め)由比正雪」は好評で、森鷗外からも賞されて、文筆で立てると確信し、「加藤清正」「明智光秀」「織田信長」と連続して刊行するが、生活するほどの稼ぎにならず、続いて予定していた「石田三成」は書かずに断筆。「加藤清正」が熊本県人を感動させたことから、**

**熊本で創刊された自由党系の{九州新聞}の主筆に招かれるが、低調で、幸徳が結婚式当日、新婦を残して逃げ出したのを説得。やがて、財をねらうようになり、辞めて上京し、相場師に転身、才覚で稼いで行くも、転変後、{萬朝報}に入った幸徳から堺利彦を紹介されていて、**

**安子とようやく世帯を持てるようになる。すっかり社会主義者に転じてしまった幸徳・堺らの{週刊平民新聞}が発刊されると、思想的には相容れないにも関わらず、友情から寄稿者の一人となる一方で、国会での東京市街鉄道問題に介入して荒稼ぎするなど、政界の策士ぶりを発揮し始め、**

**「新報」で、週刊{経済新聞}を創刊し、経済評論家八代久吉を主宰として、その経営にあたり、ゆとりもできて、漢詩人と親交し、句会を開き、名所旅行などしているが、自らの志の分裂を隠すことによつてか、不眠症に陥り、そこから脱するようになり、自虐的な「寸前暗黒」なる連載をしたりしながら、幸徳がアメリカへ出発したのに対応するように、電気鉄道会社視察のためハワイ旅行。やがて、兜町に勢力を築き、東京市街鉄道、大連株式商品取引所などの要職を歴任して名を知られ、株式投機で巨利を博すも、後ろめたさ故か、ますますラディカルになった幸徳の窮乏を助けるなどするうち、政治家を志すようになり、**

**保守政党入りに反対の幸徳から止められるもかまわず、「衆議院出馬をめざして、自宅のある東京四谷を選挙区に対策を練るも、今回は出馬断念、長友鈴木天眼の当選を喜ぶうち、{成功館}卒業直前からの師で禪僧の前島元策が、府下野辺の普門寺に転住してきて、寺の借金を返済したいと**

**幸徳が妻千代子を離縁して、入獄中の荒畑寒村の妻菅野須賀子と同居。郷里子浦に家を建てるなか、勸請という名分のもと、運慶作という「愛染明王像」を引き取る話が出て、運命の出会いとなり、四谷に買った自宅の敷地に堂宇を建立して祀り、以後、仏像蒐集に踏み出すことになる間も、政界への思いは一層強まり、大逆事件の直後、郷里中村の正福寺墓地に建てられた幸徳秋水の墓碑銘を自ら執筆、**

**「新版由比正雪」のあとがきで、二律背反的に生きてきたことに赤面しながら、郷里の静岡県から出馬、次点になるも、策士ぶりを発揮して、繰り上げで衆議院議員に選出され、以後、当選7回。立憲政友会に所属し、山県有朋の腹心の陸軍省の田中義一と交際し始め、いわゆる大正政変で、原敬と田中を自邸で密会させるなど、早くも策士の才が開花、以後、参画しない政変は無く、「政界の惑星」と目されるようになる。長田偶得の友情を忘れず、麻布広尾に私邸建築の折には、敷地内に一軒独立の家を提供し、村上浪六の人情も忘れず、30年ぶりに根岸の家を訪ねている。幸徳亡き後も、妻だった師岡千代子の面倒を見続けて、感謝され、女道楽しながらも、子のできない糟糠の妻安子をいたわることもひとかたならなかった。**

**大臣の椅子を狙う素ぶりは見せず、議会にも出席少なく、自らが宿命の寿命と決める数え54歳が迫るなか、「運慶業績考(附愛染明王像)」を著し、黒坂勝美から賞賛の序を贈られ、病後を逗で過ごす徳富蘇峰と文章談義し、自著「織田信長」を褒められたりしながら、原敬率いる政友会が圧勝して、自らも2度当選、大連取引所理事長にもなつて、**

**松野鶴平らと大連滞在中に、原敬の凶報を聞くが、松野らが急遽帰京するのに、現地に残ってその後の政界を読み解いた後、原の遺言による故郷盛岡の葬儀に出席し、未亡人を連れて帰京、原の預り金をきちんと返済する一方、早くも、田中義一の担ぎ出しに動き始めるが、**

**肺癆症に罹って寝込んでしまう。この間、麻布広尾に宏壮な邸宅が完成(現在のドイツ大使館の敷地)し、「愛染明王像」の仏殿と同居。鎌倉で大地震に遭遇。大御所西園寺公望に標準を合わせて、政界に暗躍、**

**高橋是清総裁をかついだ第二次護憲運動で圧勝させるも、その首を内から落とす役割を演じ、田中義一総裁の実現させたことで、世間にも「政界の大策士」の名が知られるに至る。業因が堪えるのか、その前段階で、犬養毅を一時政界引退に追い込んだ盟友、自らと同様の大策士古島一雄と、六道の辻談義。すでに、傘下の代議士たちは自立するようになって神通力を失い、**

**田中内閣の行政制度審議会委員となり、昭和天皇の即位大礼での初めて礼服に、「猿にも衣装」と自嘲、政敵久原房之助の入閣に反対して失敗したため、離党し、鎌倉の別邸に隠棲。重なる復党の誘いにも応じないなか、「愛染明王像」を貰い受ける際に領収証等を残さなかったことから、恨みを買った久原の仕掛りで、所有権を巡って、普門寺一派と訴訟問題になり、**

**陸軍暴走を憂い、倒閣へ裏活動の間、張作霖事件が起こり、田中義一は天皇から詰問され内閣総辞職。この年の衆議院選挙には中立で立候補して当選。「紆余曲折の末、像自体は自邸に留まる。**

**自著「日本経済変革論」が無断で出版されるもとがめず、「西園寺公望伝」を書こうと、{中央公論}に「西園寺公の第宅」を発表するも、その道は他者に閉ざされ、衆議院選挙出馬も停止、**

**なお政界の策士の余韻は残っていて、貴族院議長になった近衛文麿が挨拶でたらに來訪、専門家筋の垂涎の的にもなった蒐集品の仏像書画・刀剣盆栽に親しみ、読書文筆に明け暮れる伝記執筆に努め、預かっていた旧友幸徳の遺稿をもとに、「(堺利彦の号)枯川と秋水」を書いて堺に付託、堺が発表後、**

**{中央公論}に載せている。入獄で暇乞ひに來訪した林房雄を、共産党運動から転向させ、作家活動に専念させるべく、出獄後の林のために、家族の家まで世話をしている。病を得て、鎌倉で床に就く日々を送り、**

**中央公論社より「懷往時談」刊行し、「西園寺公伝」の原稿を焼き捨て、日中戦争始・・・1937=65歳**

複数の女性の間に、多くの子を遺し、咽喉結核で没した。